

社会科ブックトーク No.3 「学ぶ楽しさ～京大では変人はホメ言葉です」

「社会に出て、こんな勉強が何の役に立つのだろう？」勉強につかれたとき、ふと思ったりしませんか。京都大学を代表する数学者、森毅（もりつよし）名誉教授（2010年逝去）はこう断言されます。「あんたのいうとおり、こんな勉強は社会に出て何の役にも立たん。ましてや社会に出たら、一切する必要はない。だから今やるんや。こんな勉強は今しかできんから、今頑張りなさい。」学ぶのは「進学に必要だから」、「就職に必要だから」、だけではありません。学問はそれぞれのものが楽しい。そんな学問の一端を垣間見せてくれるのが「京大変人講座」（山極寿一・酒井敏・川上浩司・越前屋俵太他）です。

「学校では教えてくれない恐怖の地球史」「変な生き物たちのサバイバル術」「なぜ鮎屋のおやじは怒っているのか」などタイトルを見るだけでハテ？と思うものばかりです。その中で社会科と関連が深い内容を紹介します。川上浩司さんの「**なぜ、遠足のおやつは300円以内なのか～人は不便じゃないと萌えない～**」です。

世の中は便利なほうがいい、そのために技術は進化している。しかし、手間がかかって面倒くさいこと＝「不便」に人気があることもあるのです。登山は疲れるし、危険で、お金もかかります。しかし、これがエレベーターで富士山に登れるようになったら楽しいといえるでしょうか。

遠足のおやつもおなじです。300円という制約があるからこそ、自発的な工夫やチャレンジを許してくれる度量の広さをもっているのです。また、便利すぎるとあえてチャレンジしてみよう！という意欲が生まれず、かえって商品が売れないという矛盾が生じてしまうそうです。AIによって何もかもが「便利」になる今こそ、「不便益」を取り入れた商品やサービスを提供してみようと筆者は提案されています。

役に立つ＝素晴らしいという考え方から抜け出して、知ることそのものの楽しさ、そして一見役立たないことが実は役に立つという楽しさをこの本で味わってみませんか。

